
君の手をとるそのために

じーた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の手をとるそのために

【Nコード】

N4413U

【作者名】

じーた

【あらすじ】

何の脈絡も無い先輩からの呼び出し
そして告げられるのは死角からのアップパーカットのような告白
恋愛べたな悩める少年のお話……です、たぶん。

「宮音、ちよつといい？」

とりあえずといった感じで制服に着替え、帰宅するべく更衣室を出た直後に呼び止められる。

振り向いた先には部活の先輩、腰まで届く長髪が特徴的な女性であり、「姐さん」なんて呼び名が恐ろしいほどしつくりくるひとだ。……先に言いますけど俺の財布は軽いですよ」

なにやらただならぬ雰囲気を感じ取り、軽口を叩きつつ全力で記憶を探ったりするのだが、呼び止められる理由の推測は不可能だった。何があっても対応できるように心をフラットな状態にしつつ、眉根を寄せて不機嫌そうな先輩の顔を見つめる。

「そういう冗談は立て替えてやってる部費を払ってからになさい。それより宮音、キミは朝の占いかチャックするタイプ？」

「見ますけど、記憶には止めてませんね。意味ないし」

まったく要領の掴めないままで機械的に答えると、先輩はなにやらため息を堪えるような様子で腕を組み、結局小さく吐息した。だるうね……と小さく呟き、まるで深刻な命題でも見つめるかのような視線を俺に向ける。

「ちよつと気になったんだけどね、宮音の今日の恋愛運」

——うむ、良い月だ。

誰にというわけでもなく、心の中でつぶやく。夜空の中にぼつりと浮かぶ満月は、よく考えればありきたりなもの。しかしあえてそんなことを言ってしまうような心境だったりする。

深夜の公園、制服姿でベンチに寝転がってる俺ってのはどうなんだろう？

一瞬そんな疑問が脳裏をよぎるが、面倒なので考えるのは後回し

にする。

まあ、誰に見咎められるというわけでもない。気にしなくても平気だろう。

「とまあ、すぐに逃げようとするのはよくないな」

脱線しかけた思考を言葉を発することで引き戻す。今の俺にとっては月も太陽も後回しだ、もっとごく身近な、俺の精神活動に直結する難題を解決しなければいけないのだから。

時間にして四時間と……三十二分ほど前か、部活を終えてさあ帰るかと思つた直後のことだった。突然先輩に声を掛けられ、連れて行かれた先で待っていたのが一年生の後輩。

普段やらないようなミスを散々やらかしたのを覚えていたので、なにかあつたのかと訊ねる前に発せられた台詞に疑問は粉碎された。白状すれば、思いもよらない愛の告白なんてものは初体験だった。知り合つてから三ヶ月ばかり、俺が知っている彼女のことといえば、ひたむきな性格と過去の負傷をいくつか、あとは部活規模で交換したメールアドレスくらいのものでした。

どこでかぎつけたのか、待ちかまえていた男共からは無責任にはたき倒され、女からは泣かせたら殺すなどと本気で脅され、家にも戻らずこんな場所にたどり着いてから無益に時を過ごしていたりする。

——久々に受けた本気の言葉。頬を染め、目に涙まで浮かべた表情が今でも目に焼き付いている。

いい子だ。以前から感じてはいたが、今日で確信に変わった。

それだけに、悩みも深い。

あれだけの台詞、あれだけの心を持った彼女の気持ちに応じる根拠が俺にはない。

言葉だけなら造作もない。俺でよければと前置きして、彼女の申し出に応じればいいだけなのだから——。

だが、そうして俺は何をしてやれる……？ 彼女と登下校を共にして、休日にはどこかへ連れ出して、彼女のことを一番に考えてや

れるようになればそれで充分か？

今の俺にとつてそれは難しいことではないし、必要ならば命を賭してやってもいいと、彼女に言える確信も得た。

しかしそんなものに価値など無い。自慢できる話じゃないが、俺は俺という存在に全く興味が無い。何故生きているのかと考えることすらとうに止めたし、突発的な死が訪れることを待ち侘びてすらいる。

今こうして生きているのは俺の人生が俺の自由に出来るものではなく、俺にとつての生きる理由は俺を生み出した両親が望んでいるからに過ぎない。

俺という人間は両親が望んだが為に生まれてきたものであり、これまでの成長にも両親の労力がつき込まれている。この命を好きにするのは、少なくともその借りを返済しきった後のことになる。

つまりは、詰まらない人間なわけだ。無難と思える生き方を選択し、必要最低限の努力でもってありきたりな人生を送ろうとしている、どう考えても平均以下の価値しかあるはずはない。

彼女が俺の何を勘違いしたのかは知らないが、それが幻想であることを否定できない。

果てしなくネガティブな思考はとろとろと下降を続け、そろそろ底に落ち着きそうだというところで声が聞こえる。

「見つけました。宮音春人さんですね」

固まりかけていた決意を遮るようにして、降ってきたのは幼さを残した高い声。

思考に集中しすぎた迂闊を反省しつつ、声の出所に目を向ける。防犯灯に照らされる姿はセーラー服姿の少女のもの、三メートルと離れていない場所に仁王立ちになっていて、柔らかそうな髪が肩の上で揺れている。見覚えのある制服は卒業した中学校のものであることに気付くが、相手が誰かなんていうところまでは判るはずもな

い。

とりあえず、俺を捜していた様子なのは理解できる。

「名前は思っているとおりが、なにか？」

上半身を起こす。固まっていた筋肉をほぐしながら訊ねると謎の中学生は足音も高く俺に詰め寄ってきて、

「はじめまして！ あたし、麻野真矢つていいいます」

夜の公園に響き渡るいい声で、俺に頭突きをかまさんばかりの勢いで直角の御辞儀——、これ以上ないくらいあっけにとられている俺に気付いた様子もなく、なにやら物理的に押し切られそうな勢いでまくし立ててきた。

「突然すいません。宮音先輩の居そうな場所つてのを教えてもらってはいたんですけど、ビルの屋上だとか地下駐車場だとかって意見があまりにも多かったので先にそっちを回ってみたんですが、なぜだか比較的まともな場所にいたのではつきり言っただけです。散々走り回ったあたしの体力はいつたいうなるんでしょう？」

麻野真矢とやらは責めるような目つきで俺を見て、何かに気付くと慌てて首を振る。

「すつ、すみません！ あたしちよつと混乱しているみたいで。ごちやごちや考えながら走ったのがよくなかったのかも知れませんが、今は忘れて下さい。カットです、テイクツー行きましょう」

「よし、なら最初に声かけるところからだな」

「そうですね、あたしがベンチで寝ている人にもしやと思っただけ寄って——じゃなくて、あつさり乗らないで下さい！ 余計に混乱するじゃないですか」

両手で何かを押しつけるようなジェスチャーまで入れて、なかなか愉快なりアクションをしてみせる麻野真矢。ひとしきり穏やかな気分浸ったところで、ベンチの脇に置いていた缶コーヒーを放り投げてやる。

「とりあえず落ち着け。話があるならちゃんと聞こう」

「……どうもすみませんでした。男の人と話すのはあまり慣れて無くて」

缶コーヒーを両手で包み込み、項垂れる麻野。警戒されているのか、座っているベンチこそ一緒だが彼女は端のぎりぎりに腰を下ろしている。

「支障はない。とりあえず話は判った」

というのは、横に座っているのは麻野真矢という名の少女。現在中学三年生で、俺に告白してきた美原明菜の後輩で部活では世話になっていたということだ。二人が女子バレー部だったのに対し俺は男子バレー部に入っていたのだから同じ体育館で練習したことも少くはないはずなのだが、そこは他人の顔を覚えない俺のこと、どちらにも全く記憶にない。

「しかし、先輩のことが心配だったと言うところまでは判る。そこで何故俺を訪ねてくるんだ？」

「そんなんっ！？ 知らないようだったら言うておきますけど。ウチの先輩は飼ってたカナリヤが死んだショックで半月寝込むんですよ？ 三年越しの想いが砕けてたなんて事になってたりしたら、あたしが訊いた瞬間に人格が崩壊しかねません」

迫ってきた麻野が勢いよく手をついたせいでベンチがみしりと音を立てる。回避があと一瞬遅れていたら潰されていたであろう右手をさすっていると、彼女は自分が何をしたのか理解して眉尻をさげた曖昧な笑みを浮かべる。

「えと……その、ですね。とにかく真っ直ぐな人なんです。そこらに生えてる竹なんかとは比べるべくもありません、ちょっと間違えたら光にもタメ張れるくらいの直進性なんですけど、やっぱり女の子ですから脆くて……。けれど針灸の針くらいしか強度がないくせにコンクリートにも真っ直ぐ突っ込んでいってしまうような人なんです——。放っておけるはずないじゃありませんか」

良い先輩には良い後輩が懐くものか、ひょっとしたらお節介が過

ぎるかも知れないが悪くない。この子の言葉も力がある。

—— まったくもって、うらやましいことだ。

「それで、返答についてなんですが……」

恐る恐るといった感じで目を合わせてくる麻野。

「ああ、少し時間をくれと。そう答えた」

自信を持って言えないのは自分でもその対応に疑問を感じていることのあらわれか、案の定麻野にも少し落胆したような色が見える。「何故ですか？ って、訊いても良いですか」

当然の疑問だろう。数秒かけて言葉をまとめ、視線は前方に向けて口を開く。

「端的に言えば、決められなかった。好意を持ってくれるのは光栄だし、断る理由もない。美原明菜って人間には好感が持てるし、興味もある。しかしね、好きだと言われてじゃあよろしくつてのも無責任な話だと思わないか？ あんな告白を受けたとなると尚更だしな」

言ってから、概ね本音だなと再確認。俺の人生観の云々は彼女に話す事でもないだろう。

「ふむ……つまり先輩を満足させる自信がないと？ それなら大した問題ではありません、美原先輩も初めてのはずですから、焦らずいっしょにステップアップしていけばいつかきつと良くなる日があるはずです。大事なのは愛ですよ、愛」

「……………」

拳を握った熱い眼差しを無表情で受け止めること数秒間、先にギブアップしたのは麻野の方だった。

「ひっ、非道いです！ 冗談なのにそんな態度されたらあたしがヘンなコみたいになっちゃうじゃないですかっ!？」

暗い中でもはっきり判るくらいに頬を染め、無闇に両手を突き出してくる麻野をあやしつつも口元がゆるむのは否めない。

「ヘンとは言わないが、充分に面白いからそのあたりは自信を持っていとおもっぞ」

「意図しない角度で面白がられてもはずかしいだけですってばー！」
両手に顔を埋める麻野は素直に愉快だと思う。とまあ、しきり直
せたところでついだに訊いておくかと思ひ立ち、黙り込んでしまっ
た麻野を見やる。

「参考として訊いておきたいんだけど、告白つてのはなにを求めて
するものだ？」

「え——？」

何気ない質問だったつもりが、麻野の反応は俺の予想とはずいぶ
ん違うモノだった。まるで頬に平手打ちを食らったかのような勢い
で振り向いて、たぶんその勢いが良すぎたのだろう……バルサ材を
折るような乾いた音が俺にも聞こえた。

「~~~~~!!!!!!」

「……安心しろ、骨が鳴っただけだ。そのまま動くなよ」

目を見開いて悶絶する麻野の首を撫でてやる。過敏な神経が痺れ
た状態になるからかなりの悪寒を伴うのは俺も経験があるからよく
判るのだが、それも数十秒で収まるもの。

「……く、首が折れたかと思いました」

荒い呼吸を繰り返しながら涙目になる後輩を見やり、なにが悪か
ったのだろうと考える。

まあ、どうやら俺の質問がまずかったらしい。ということくらい
しか思いつかない。

「何かまずいこと言ってしまったようですまない。しかしマジだ」

「手を触れずしてあたしの脊髄を破壊するための巧妙な手口という
わけではナシに？」

「ああ、ナシに……」

「……………」

そして妙な沈黙。俺は問いを投げかけた後なのでとりあえず待つ。
「質問で返してしまうので申し訳ないんですが……」

少し先の地面をじっと見つめていた麻野はついと視線を向けてき
た。

「先輩は、誰かを好きになつた経験はないんですか？」

「まあ、記憶にある限りはつてことになるけどな」

掘り返せばそういう想いを抱いた相手も居たかも知れないが、そのあたりのシナプスはとうに死滅しているだろう。ならばないと言つても間違いないはずだ。

麻野なにやら難しい顔をしてぶつぶつ呟いている。

そして俺は、空の向こうに見える光をぼんやり眺めていて思い出した。

……晩飯を頼まれてたな。もはや手遅れだが。

もつとも、我が家の妹殿は夕食の作り手が居なくなつたところで困りはしまい。機嫌は損ねるだろうが、帰りがけにプリンのひとつも買つていけば何とかなる——と思う。

「とりあえず言わせて貰いますけど、求めて——なんて言葉はよくありません。それだとなにか見返りを期待しているみたいじゃありませんか、そりゃあ、いい返事が貰えたらいいな、くらいは考えますけど、告白を打算みたいに言うのはよくありません」

「そっか、すまなかつた。そう言うつもりはなかつたが、質問の仕方は良くなかつたな」

「はい、覚えておいて下さい。では宮音先輩——。憧れという感情は理解できますか？」

「ああ、それは解る。俺にも憧れてる人くらいは居るから」

「良かった。なら話は進めますが、美原先輩の想いはその憧憬が段々と変わつていったものなんです。バレーのプレースタイルから始まつて、それが宮音先輩そのものに魅力を感じるようになるまでそんなに時間は掛からなかつたみたいですけど」

「いやはやホントに……などと、何故か頬を染めて明後日の方を向く麻野。」

「——つて、別にあたしが照れる必要はないですよね……。とにかく、です」

突然意気込んで、直後に吐息して身体のを抜く。ここに来てや

つと無闇に力んでいた瞳に穏やかなものが戻った気がした。

「素敵だな、あんな風になれたらな、なんて風に見ていたら、いつのまにか恋しちゃったわけなんです。なんというか、憧憬と乙女心が化学反応を起こした化合物のようなものだと思って下さい。しかしながら理屈では説明できません、感じて欲しいんです。とにかく憧れてるだけじゃ我慢でなくなっただけというか、自分とその人の領域が共有する領域をできるだけおつきくしたいと思うような感情です」

人差し指を立て、こちらの目を見据えて言う麻野。子供にものを教えるようなその態度には意見がないわけでもないが、ここは黙するが吉だろう。

「美原先輩はある日言ったんです。あの人と並んで歩けたら幸せだろうな……と。そりゃもう、思わず待ったをかけてじつくり眺めてしまっただけに乙女乙女した表情でした。写メ撮ろうかとも思いましたが、電気信号ごときに記録は出来ぬと止めておきましたけど」

その記憶は電気信号に他ならんけどな——。そんなツツコミが喉までせり上がってくるが飲み下す。そんな俺の苦勞に気付いた様子もなく麻野は続けた。

「話がずれましたが、そんな美原先輩があなたに言いたいののは、友達になつて下さい、でも、一緒に歩いて下さいでもないんです。相手のことを知りたい、自分のことを知ってもらいたかったり、二人だけの特別な関係になりたいって想いを告げる言葉っていうのは決まっているんです」

言葉を切り、軽く握った拳を胸に。麻野は僅かに頬を染めて告げてきた。

「好きです——、付き合つて下さい」

思わず聞き返さなかったのは、たぶん俺のやさしさだと思う。どこかでケンカをしているらしい猫の鳴き声が嫌に大きく聞こえ

る。

とりあえず麻野の肩に手を置いてからベンチを立つ。手近な自販機で缶コーヒーと紅茶を購入。ベンチに戻ってから、固まったままの麻野が手にしていたコーヒーの缶と紅茶を入れ換える。

ぎくしゃくと礼を言った麻野はおずおずと訊いてきた。

「あの、けっこう一生懸命だったんですけど伝わりました？」

「まあ、麻野が役者を目指すとしたら少しばかり難しいだろうな、ってことは」

今度は耳まで赤くして叫く麻野をなだめてから、小さく吐息。

「いやすまん。冗談だ」

肩で息をする後輩を横目にコーヒーを一口啜る。

そのままにも言えずにいる俺に対し、麻野は唇を尖らせて訊いてきた。

「あの美原先輩に好きって言われて脊椎反射で即おっけーを出さない時点で、あたしの左ストレートでマツトに沈んできたクズ男共とは一線を画しているとは思いますが、先輩は一体なにを悩んでいるんです？」

「さつきも言ったと思うが、安易に頷けないだけだ。そもそも俺はそんなに出来た人間じゃない。美原がなにかを勘違いしているんじゃないかという疑問すらある」

そんなことを言いながらふと気付く、つまり俺は美原に対して『俺は君に相応しい男じゃない』なんてことを言っただけで断ろうとしているのか。

妙な話だ、彼女の想いを無駄にするだけの根拠を持った理由だろうかと熟考するが、答えははっきりしない。そもそも俺は彼女の求めて——いや、表現が悪いんだっただけ。彼女を幸せに出来る自信が無いと思っている。では彼女の幸せとは何だ？俺に与えられるものが何であり、俺はその中のどれに対して自信がないのか。

何一つはつきりするものがない、頭の中には曖昧な感情の積み重ねから結論を出しているようにしか思えない構図が出来上がってい

る。

そして、『足りないもの』とはなにか……？

「では確認です。美原先輩に気に入らないことがあるわけではない、これはいいですか？」

「無論だな、むしろ上等すぎる」

「街を歩くカッパルの姿に自分と美原先輩を当てはめて想像してみ
て下さい、不快ですか？」

「……慣れないものはあるが、不快とは違うな」

言つと、麻野は笑った。なにやら満足げに、俺を見てぐいつと親
指を立てる。

「なら何も問題はありません。先輩は、よっしゃ！ 付き合おうぜ
とサムアップで十分です。先輩に女の子を喜ばせる技術とか意欲が
ないのははつきり言つて残念ですが、ウチの美原先輩に限つてはそ
ういうのがあんまり要りません。たぶんそこの公園を一緒に散歩
してちよつと話をするだけで幸せゲージも満たされることでしょう。
それに宮音先輩だって、美原先輩ほどの方が側にいたら喜ばせてあ
げたいと思うはずです。そしたらその欲望に正直になって下さい、
あたしでよければいくらでも相談に乗りますしお手伝いもします。
むしろお二人のデートにこっそり追従してここぞというポイントを
教えてあげたいくらいです。」

いいですか、このあたしが保証します。お二人はぜったい上手く
いきます。

先輩はきつと美原先輩を大切に出来る人だつて信じます。先輩も
弱気なこと言わないで自信持つて下さい、先輩自身がなんと言おう
と、美原先輩は宮音先輩を好きになつたんです。だから……だから、
あとは宮音先輩がそれに応えてあげるかどうかなんです」

よほど気持ちが悪まつていたのか、息継ぎもそこそこに麻野はま
くし立てる。聞いていてすがすがしいほどの本気っぷりで、ほんと
に美原のことを慕つてゐるんだなと思ひ知らされる。

おまけに――、

「まあ、とりあえず涙を拭いたほうが良い。流石に強烈すぎて対応に困る」

俺にしては気が利くものだと思分で感心しながら、運良く未使用のままだったハンドタオルを差し出す。綺麗に筋を作って涙を流していた麻野は言われて気付いたとばかりに驚いた顔でタオルを受け取る。

「すつ、すいません。な、なんだかあたしばっかり熱くなっちゃって。でもやつぱり、先輩本気だから、先輩が悲しむところは見たくなくて……お節介だし、たぶん迷惑だらうなっってことも判ってるんです、けど、あ、あたし——」

「安心しろ麻野、最終的にどうなるかは知らないが、俺も君の大切な先輩を悲しませようとは思わない」

何か吹っ切れたような気持ちでベンチの背もたれに体重を預け、綺麗な満月を見上げてのんびりと告げる。

「少し前から気付いてはいたんだが、俺が美原にイエスと答えようとしな原因つてのは、美原のためとか言いながら結局のところ俺が生き方を変えたくないっただけなんだよな。しかし、俺の生き方がこのままじゃ良くないっつても白明の理でね、良い機会だからこれから人生ねじ曲げてみるのも悪くないと思ってる。」

美原明菜の期待を裏切らない男になるっつてのは、なかなか目指し甲斐のある目標だ。

もつとも、ここ十数年で凝り固まった詰まらん生き方を変えるのも難しいだろうけど、やってみる価値はある。何よりこの決意を後押ししてくれた彼女のためにもなる努力だし、そんなに分の悪い挑戦でもないはずだ」

今のところは、口だけという印象が強い台詞だなという自覚はある。しかし嘘にするつもりはない、確かな決意を胸に刻みながら麻野を見ると、驚きと困惑が半々と言った赤い眼。

——こちらからもよろしく頼む。君を幸せに出来るよう、努力は

怠らないつもりだ。

胸中で呟く台詞に、まあこんなものと評価をつける。

おそらくは明日、学校で会えるはずだ。誰よりも早く登校して朝練の準備をしている彼女のことで、俺も少し早起きをして学校へ向かおう――。

前途は多難な五里霧中、刻みつけたはずの決意はいつふやけてしまつものかと心配になったりもする。

しかしまあ、それほど悪いことにはならんだろう。

曖昧な確信を胸に見上げた月は、不思議と綺麗に見えたような、見えないような……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4413u/>

君の手をとるそのために

2011年6月29日03時12分発行